

子どもと社会性



あつという間に2月になりました。

2歳児から4年間たけの子に通った園児が来月卒園します。ママが大好きで、よく泣いていたことも、今は懐かしい思い出です。今はたけの子のリーダーとして、実に心身共にたくましくのびやかに成長してくれたなあと感じています。そんな子どもの成長あれこれ、来月お母さんから直接感想をいただくことにして、今回は子どもが社会を感じて成長していくことを書きたいと思います。

子どもがまず最初に出会う社会、それは、家族です。『子どもにとって、親密な結びつきがみられる他者ほど重要であり、そうした人びとの期待と評価が子どもの社会化に影響を与えるのである。こうした人びと―両親や教師、仲間など―を「重要な他者」というが、一般に、幼少期の子どもにとって「重要な他者」は母親である。』

母親から授乳を受け、母親との母子一体性のかにかあって、安定した心理状態に置かれる「口唇依存期」から、離乳（＝口唇分離）と排泄訓練が要求される「肛門期」へと移る時には単なる排泄訓練以上の重要な意味を持ちます。

というものの、『子どもは、①排泄コントロールという困難な課題を要求する人（母）とそれを求められる自分とを異なる人間として識別するので、母子一体性から脱却でき、②それはまた子どもが初めて達成した自立的行動であって、③離乳と排泄がうまくできるようになることで母親が喜ぶことを知り、母親を喜ばせようと自立行動をとるようになる。』つまり、子どもは母親から一方的に愛情を受けるだけでなく、母親に愛情を返すという相互作用が形成されるのです。この安定した

段階を「愛着期」と呼びます。

子どもは3歳ぐらいになると認知能力・運動能力が急速に伸びるので、子どもを統制するために新たな力が必要になります。ここで「権威」を持つ存在として父親が登場します。父親の登場によって、子どもは母親への全面的な愛着を放棄し、親以外の外社会の他者と関係を築き、精神的自立に向かい始めます。

そして、性役割を知り、父親モデルと母親モデルを学び「性の社会化」が進行していくのです。やがて青年期にかけて、親から得た「他律的道德」から、仲間集団における社会化によって「自律的道德」へと移行していきます。

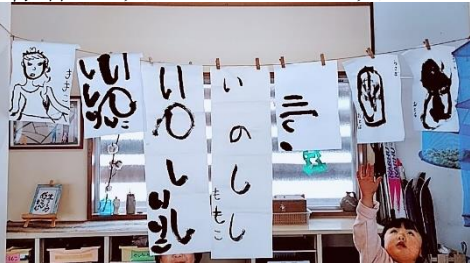
では、たけの子が果たしている社会化の役割とは一体なんなのでしょう。

『かつては、幼い子どもは母親や年長のきょうだいの背中におぶさって成長してきた。子どもはいろいろな人の背中におぶさり、骨格や筋肉の違い、背中の動きや大きさの違いなどをぬくもりとともに感じながら成長していたわけである。子どもはそのぬくもりを通して、親密で密着した身体と身体の間接を感じ取り、その体験から人は、自分であるということとは「自分の身体であること」「他人の身体と自分の身体は違うこと」の認識、さらに親密な人との身体が密着していることの安心感を育んでいきました。』

子どもはいろいろな人との関わりの中で社会性を育てて

いっていったわけです。『内、放送大学大学院テキスト『人間発達論特論』より』

たけの子では、年齢別で保育をせず、異年齢集団で保育



をしているので、それが子ども達の社会性を育んでいるのです。

そして、同年代だけであれば、できないことがあると自分と他者との優劣をつけがちですが、異年齢であれば、できないことがあって当たり前だということが日常的にわかります。人と違うことは当たり前ということを感じます。

でも、自分は「こうしたい」ということがあるとどうしても他人とは自然とぶつかります。その時こそ、どう折り合いをつけていったらいいのかを学ぶチャンス！と私たち保育者は捉えています。わたしたちはいつも子どもにも問いかけています。「じゃ、どうしたらいい？」

そう問いかけて得た子ども達からの答えが、大人が考えもしなかったことだったりすることが度々あります。なんて子どもたちは健全で柔軟なのだろうかと思ってしまう。誰も傷つけず、しかも、自分も納得できる方法を選ぶのです。

わたしもかくあるべきと日々子ども達から学んでいます。わたしの社会化はまだまだ続くようです。 辺見妙子

寄付や支援をいただいた方々 1月 順不同

支援金―渡部鋭幸様、齋藤敦子様、JA・SO様、

土田英順様、松下音次郎様、荻野美恵子様、徳田隆代様、小平神明宮様、小平学園教会様

りんご 高橋果樹園様 快医学ネットワーク様

放射能測定マップ読み解き本

うけいれ全国保健促進WG様

NPO法人ふしま30年プロジェクト様

